

土佐育英協会の「生い立ちシリーズ」②

〈富士見寮〉から〈砂土原寮〉へ

教育制度の整備・拡充に伴って、高知県からの上京学生も増加し、富士見寮への入寮希望者は増加してきました。しかし、富士見寮は規模が小さく、構造も不完全なうえ、財政的余裕もありませんでしたので、増改築の要求に応えることができませんでした。

そこで、当時の県会議員片岡健吉氏に資金の募集をお願いしたところ、高知県議会において多くの賛同を得ることができ、高知県から奨学金貸与資金5千円と寄宿舎建築資金として6千円が支出されることになりました。この6千円と富士見寮売却代金の一部を使って、明治36年9月、牛込区(現新宿区)砂土原町に新寄宿舎が完成しました。これが砂土原寮で、収容人員は34名でした。土地は山内侯爵家より無償借用させていただきました。

寮舎は明治44年に増改築され、収容人員は44名となりました。大正6年に大災害が関東一円を襲い、寮舎や関係建物は多大な被害を受けましたが、幸いなことに負傷者はなく、火災も免れましたので、早期に復旧することができました。

(※大災害は「大正6年の大津波」と言われる台風による高潮被害で、「関東大震災」はこの6年後に発生します。)

砂土原寮の頃の学生は、‘末は博士か大臣か’という言葉に代表されるように、国家や郷土に有為な人材となることを期待され、また、学生もその期待にそって勉学に励むことで、将来高い地位を約束されていました。産業界からの高等教育を受けた人材需要の高まりや、教育制度の整備・充実に伴い、大正時代後期以降、学生数はますます増加し、都内の下宿事情は需要に追いつかず、砂土原寮への入寮希望者は後を絶たない状況でした。このため、当時の入寮選考会は、高い倍率で行われていました。

砂土原寮の「明治・大正時代」の寮生の気質と「昭和期」の寮生の気質は、「特権的性格」と「自由謳歌の度合い」で区別できます。

明治・大正時代の寮生は、舎内で各種講演会、座談会などを開くとともに学校外でも積極的に情報収集をしたり、在京高知県出身学生の中心的役割を担うなど、勉学・連携中心の学生生活を送っていました。ただ、勉強ばかりしていたわけではなく、余暇も有効に利用していました。明治期にはすでに寮の庭にテニスコートが設置されており、寮生たちは、そこでテニスをしたり、時には、ハイキングや囲碁などもしていました。また、寮のすぐ近くには「神楽坂」という繁華街があり、余暇を見つけてキネマや麻雀、飲みにもよく行ったとのことでした。

ところが、昭和初期の寮生は、金融・世界恐慌の影響や戦争の影響を強く受け、寮生気質も変化することとなります。‘大学は出たけれど’という言葉に代表される

ように、寮生は選ばれたエリートであったにもかかわらず、昭和初期は世界的な不況で、産業界が採用を見合わせ、職が非常に少ないという状況にありました。したがって、この頃の寮生は職に就くために、今まで以上に勉学に励むようになっていました。

そして、昭和 13 年頃からは、戦時体制強化の影響が寮生活にも色濃く反映されてきます。数々の自由が制限されていき、寮生は極度に「学生の本分」を守ることが義務とされます。

同年に「国家総動員法」が制定され、学年短縮措置がとられて学徒勤労作業が始められます。もはや、大学での講義は正常なかたちでは行われなくなっていました。

翌年には軍事教練が必須となりました。この頃から寮においても防空演習や柔剣道が盛んに行われるようになり、また、学生修練農場も開設されました。灯火管制下にもおかれ、舎内での勉学にも支障が生じてきました。このように、寮生は国家的・国民的要請のもと、強制的に戦時体制へと組み込まれたことにより、寮生気質もそのように変化せざるを得なかったといえます。

昭和 18 年 9 月 22 日、勅令で文科系学生の徴兵猶予が停止され、ついに、いわゆる「学徒出陣」となりました。寮生たちも次々と徴兵されていきました。

そして、運命の昭和 20 年 3 月 9 日を迎えます。東京大空襲です。この空襲で、砂土原寮の寮舎は一瞬にして灰燼に帰してしまいました。

生き残った寮生たちは、戦地より帰還し、動員から解除されて大学へ復帰しました。

しかし、終戦直後の状況は、とても勉学できる状態ではありませんでした。東京のほとんどが焦土と化し、砂土原寮もすでに焼失していました。東京は深刻な食糧難、住宅難であり、また、インフレが進行していました。当時、配給される物資だけではとても生活できず、人々は身の回りの物を売り、直接、農家や闇市で生活必需物資を調達するといういわゆる“タケノコ生活”を強いられていましたので、寮生たちは、今後どうなるのか不安でいっぱいでした。

次号へつづく